

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520675

研究課題名(和文)日本のドイツ語教育におけるクラスルーム言語の使用と機能

研究課題名(英文) Use and functions of German teachers' use of German and Japanese as classroom languages

研究代表者

HARTING AXEL (HARTING, AXEL)

広島大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号：80403509

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,700,000円、(間接経費) 510,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、日本における非ドイツ語母語話者の教師がいかなる目的のもとに、日本語とドイツ語を使い分けているのかを明らかにすることである。そのために、言語選択を決定づける要因を探るとともに、教授目的ごとに受講者が母語(L1)と学習言語(L2)のどちらを使用するのかを見極めるために、ドイツ人と日本人両方のドイツ語教師を対象にして、調査を行った。その結果、受講者のL1使用を誘発する要因として、複雑な教育内容、規模の大きな授業、そして受講者のやる気の低さないしはL2能力の低さが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to find out for which purposes GFL teachers in Japan use Japanese or German as a medium of instruction. Therefore, a survey was carried out among native German and Japanese GFL teachers in order to evaluate which factors determine their language choice and for which teaching functions they prefer the students' L1 or L2. The results indicate that complex teaching contents, big class sizes, and low motivation or low L2 skills of the students are factors that trigger the use of the students' L1.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：教育法 カリキュラム論 ドイツ語教育

1. 研究開始当初の背景

本研究プロジェクトの出発点は、日本の「外国語としてのドイツ語教育」において、授業の際の教員使用言語(ドイツ語あるいは日本語)の選択の仕方が非常に多様であるという私自身の個人的な観察結果であった。先行研究においても、適切な教員使用言語の選択に関する合意は得られていない。しかしながら最近の諸研究(Turnbull/Dailey-O'Cain 2009)は、コミュニケーションを支援するために学習者のL1(母語)を利用することは、学習言語の習得を促進する効果がある事を示している。しかしながらその際、重要なのは、正しいタイミングとその量であり、それらは教育が実際に行われる状況に大きく依存している。「日本における外国語としてのドイツ語教育」という教育の状況において、どのような教員使用言語の選択が適切であるかを究明するためのきっかけとなったのはまさにこの点である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本のドイツ語授業において学習者の母語使用がどの程度行われているかを明らかにすることである。その出発点としてまず私自身の言語選択の日常のありようと、そのパターンを記述し、その背景を探った。その際2つのリサーチクエスチョンがその基礎にあった。

(1) 私は、私の授業において、どの程度の頻度で、またどのような目的で学習者の母語や学習言語を(教員使用言語として)使っているか。

(2) 私の教員使用言語の使い分けは、学習者によってどのように評価されているか?

こうしたどちらかと言えば、質的な志向を持った洞察に基づきつつ、次に日本における外国語としてのドイツ語授業での言語選択はどうなっているかという点をより幅広い教育の文脈において論じようと考えた。そのために日本全国のドイツ語教員に対し、書面による質問を行った、そこでは、次のようなリサーチクエスチョンを究明しようとした。

(3) ドイツ人教員と日本人教員の授業における使用言語の違いはどこにあるか。

(4) 彼らはそれぞれどのような目的のためにドイツ語あるいは日本語を使っているか。

(5) どのような諸要因が、彼らの言語選択を決定づけているか。

(6) 彼らの言語選択は、学習者によってどのように受け止められているか。

3. 研究の方法

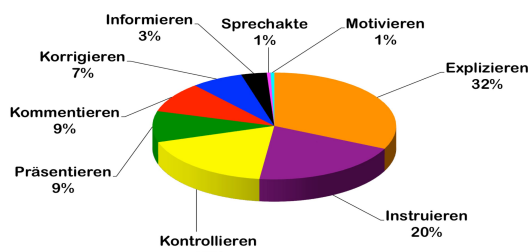
私はアクションリサーチ(vgl. Elliot 1991)という手法で、まず私自身の教員使用言語の特徴を質的および量的に記述した。方法論的なアプローチは私の授業の録音の書き起こしならびに教授者日記の記載事項の分析に基づいている。データは3つのレベル(CEFRのA0, A1 および A2 レベル)の学習者グループのそれぞれ90分4回分の授業の書き起こし記録からなる。どのような教授法上の目的のためにどちらの言語を使ったかを確定するため、私の発話に対し、授業における9つの異なった機能が対応づけられた: 1. 情報を伝える(Informieren)、2. 教材等を提示する(Präsentieren)、3. 指示する(Instruieren)、4. 質問しながら理解度等をチェックする(Kontrollieren)、5. コメントする(Kommentieren)、6. 解説する(Explizieren)、7. 訂正する(Korrigieren)、8. 動機付けする(Motivieren)、9. その他の言語行為(Sprechakte)。語数を数えるという手段で、これらの登場頻度ならびにドイツ語および日本語の配分のパーセンテージが算出された。典型的な指示のパターンや指示のためによくある言い回しを確定することができるよう、私の発話の言語による実際の表現が分析され、教授者日記における記載事項に基づいて解釈された。

私の調査の第2部をなすドイツ語教員たちに対する全国的なアンケート調査はその大部分が、選択肢の与えられたクローズドな質問からなっていた。被験者には与えられた基準に関して彼らが独日どちらの言語を優先したかについてリッカート尺度に基づき答えるよう求めた。この量的な志向を持ったアンケート調査は、頻度、平均、標準偏差を用いて評価された。基礎として用いた変数は、教員の母語、学習者の言語レベル(CEFRに基づくA0, A1, A2, B1, B2の各レベル)であった。被験者の筆記による自由回答は書き起こされ、質的な分析にかけられた。

4. 研究成果

既に提示したリサーチクエスチョンに関し、以下の知見が得られた。最初のアクションリサーチにより、私は、学習者の言語レベルが上がるにつれ学習言語をより多く使っていることが量的にも裏付けられた: 初心者(A0)の場合はドイツ語使用の割合は約45%で主として学習言語の素材の提示や、理解の度合いのチェックや、訂正などに限られていた。A1レベルの学習者は、私が言語行為や、コメントや、促しや説明の大部分をドイツ語で行うことにより、既に約70%の学習言語の指示を受け取っている。A2レベルの学習者においては、授業の運営は90%近くほぼ学習言語で行い、学習者の母語(L1)はただ複雑な内容をの説明や、重要な情報の伝達や、学習者の動機付けにしか使っていない。学習者の言

語レベルを区別せず、個々の機能に関してのみまとめると、次のような結果が得られた。
グラフ 1



解説する (Explizieren), 指示を与える (Instruieren) そして質問する (Kontrollieren) という機能は合わせて私の教員使用言語の 2/3 以上になることが示された。さらに、それぞれ 10%弱を私は学習言語による教材提示とコメントと訂正に用いているのに対し、連絡 (Informieren), 学習者の動機付けに役立つ発話やあいさつ、謝罪や感謝等 (Sprechakte) にはごくわずかの余地しか残されていない。

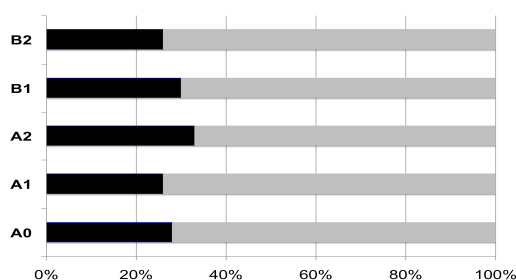
私の学生達への質問に関して言えば、3つの学習者グループへの書面によるアンケート結果は、私の教員使用言語の効率性に関する貴重な知見をもたらした: 初心者 (A0) がより多くの母語による説明を望むのに対し、上級者 (A2) は母語の使用を無駄だと見なしている。中間レベルのグループ (A1) の意見はこの点に関し、これと言った特徴はない。この調査に基づいてなされるであろう私自身の教員使用言語の変更がどのような効果をもたらすかは、私の今後の研究活動の対象とするつもりである。

他のドイツ語教員に対する彼らの言語選択に対する書面による質問から次のような知見が得られた。なお、この調査には、50の教育機関における65人以上の教員と2500人学習者が協力している。彼らには、書面による質問という形で、教員使用言語としてドイツ語あるいは日本語を選択する際にどのような諸要因が関与しているかを質問した (n=60)。平均と度数の形で示された量的な分析結果によれば、日本人教員は全体として、ドイツ人教員よりも、どちらかと言えば学習者の母語を使う傾向にある。ドイツ人教員にとっても、日本人教員にとっても学習者の母語の使用を選ぶ明らかな要因は、教える内容あるいは構造の複雑さである。またドイツ人教員にとっては学習者の側の学習動機の弱さも、日本人教員にとってはクラスサイズの大さや学習者の言語レベルの低さも、母語を選ぶ要因である。自由回答の形で明らかになった日本語利用を優先する更なる要因は時間を節約したいという配慮、ならびに1つの学習者グループ内での言語レベルのばらつきである。教員使用言語として目的言語であるドイツ語を選択しようとする場合には、とりわけドイツ語母語話者の側には、「曖昧

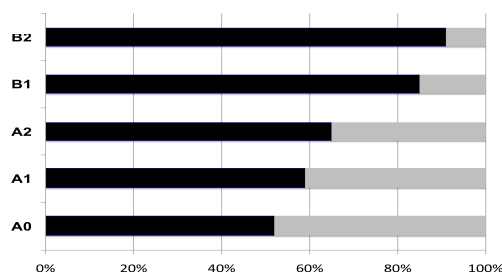
さへの耐性」を養成しようという意志があるように思われる。

質的な調査結果からさらにドイツ人教員と日本人教員の言語行動における顕著な違いが明らかになった。ここでは、それを典型的な例を通して示すが、たとえば学習者による評価に基づく知見として、日本人教員は学習者の言語レベルとは無関係にそれぞれ 3/4 は日本語 (灰色部分) を用いているのに対し、ドイツ人教員は既に初心者においても主にドイツ語 (黒色部分) を使っており、次のグラフからも明らかのように、学習者のレベルが上がるに従い、ほとんど学習言語のみの使用へと移行する。

グラフ 2 (日本人教員)

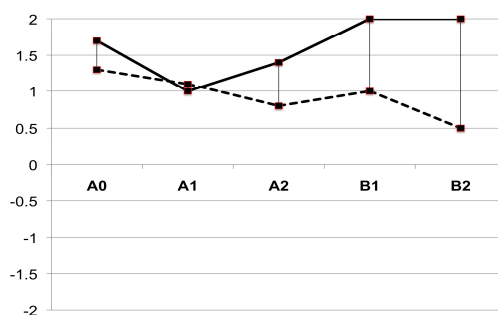


グラフ 3 (ドイツ人教員)

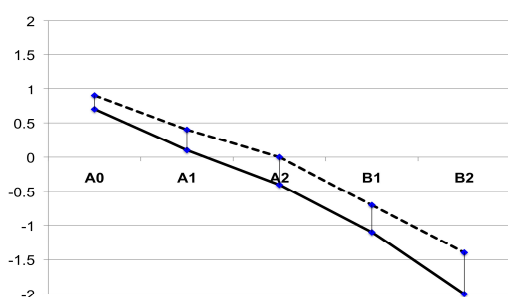


さらに授業における個々の機能に関しても、それぞれどの言語レベルに対し、教員 (実線) と学習者がどちらの言語の使用を優先するか (マイナスの値はドイツ語の優先度をプラスの値は日本語の優先度を示す) が、より詳しく示された。次のグラフは実例として練習の仕方の説明における言語の優先度の値を示したものである。

グラフ 4 (日本人教員と学習者)



グラフ 5 (ドイツ人教員と学習者)



このグラフにおいても学習者の言語レベルが上がるにつれて学習言語の使用へと移行するドイツ人教員の傾向が見て取れるが、これはまた学習者の希望とも一致する。それに対し、日本人教員は、学習者の言語レベルとは無関係に練習の仕方の説明に対して日本語の使用を優先する。しかし、彼らの学生たちは、言語レベルが上がるにつれてより多くのドイツ語使用を望む傾向がある。教員と学習者のこの種の詳細な言語使用に関する好みは、調査した他の機能においても確かめられた。

学生たちによる自由記述のコメントの質的な分析から、さらに、彼らがどのような場合にどの言語を望むかが、より具体的に示された。それによれば、日常的なコミュニケーション、繰り返し使われる定型表現、すでに習ったこと、教科書の枠内における発話、そしてある程度推測可能なすべての表現については、ドイツ語を使ってほしいと思っている。それに対し、宿題等の告知や、練習の仕方の説明、難しい内容、重要なこと、文法、事務連絡、解説、新規事項ならびにドイツの文化事情については、日本語を望んでいる。教室使用言語に関して改善してほしい領域として学習者はとりわけ次のことをあげている：教員には、「『よりゆっくりと』」、「『より多くの』」、「『簡単な』ドイツ語」を話し、「『より多くの』」、「『明示的な』理解度のチェック」を行ってほしい。彼らは、(音声教材からではなく)「教員からのより多くのドイツ語」望んでいる。さらに、教員使用言語を、より明確にそれぞれ区別してもらうこと、「より多くの発音練習」をしてもらうことを望んでいる。ドイツ人教員には(ちゃんと理解できる)日本語が話せ、学習者の質問に日本語で答えられることを望んでいる。そのうえ、「教員とドイツ語で話す」機会をより多く与えて欲しいと願っている。

私の調査から得られた知見は、全体として次のようにまとめられる：学習者の母語(L1)は日本人教員においてもドイツ人教員においても授業でのコミュニケーションの支援に利用されており、特に、より複雑な内容や

構造の説明の場合、大人数授業の場合、学習者の言語レベルや学習の動機がより低い場合には取り分けそうである。

日本人教員は、学習者の言語レベルとは無関係に、大部分の授業機能に対して母語(L1)を使う。ドイツ人教員は、学習者のレベルが上がるに従い、学習言語(L2)に移行する傾向がある。日本人教員はより多く翻訳という手段を用い、たいていの場合日本語の説明のある教材を使う。ドイツ人教員は、しばしば学習言語だけからなる教材も使い、教室ドイツ語をより多く用いる。学習者に関して言うと、ドイツ人教員からは、より多くの日本語での解説を望み、日本人教員からは、学習言語でより多くコミュニケーションしてくれる事を望んでいる。

本調査からは、さらに、教員が使用する言語に関する優先度に関して、(その母語には関わりなく)教員の間でも(言語レベルには関わりなく)同じ学習者グループ内でも、それぞれ異なっていることが示された。それゆえ、個々の状況を越えた一般的な勧告をすることには問題がある。学習者の要求を考慮して教員が使用する言語を使うためには、新しく授業を始める際に、授業や授業の場で使われる言語に対する学習者の希望について情報を得ることが望ましい。確かに、教員が、自分自身の言語的な能力の枠内で、外国語授業に対する自分なりの主張に一致する形で授業を行った方が良いことは言うまでも無い。しかしながら、決まり切った言語使用の枠組みを打ち破り、自分自身の教室での使用言語を実験的に変えてみることを可能にするある種の余地は常にあるのである。選択したやり方が、プラスの反響を生むかマイナスの反響を生むかは、たいていは学習者の反応から簡単に読み取ることができる。

本研究のもたらした1つのプラスの副作用として、それを通じ、日本の他のドイツ語教員たちに、彼ら自身の言語選択を同様に調査し、彼らの体験や苦勞していること、またその解決法などについて専門家間で議論するよう、促すことになったことがあげられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計9件)

Harting, Axel, German teachers' choice of classroom language. *JALT Proceedings*, 査読有, 2014, [in print].

Harting, Axel, (2014): Fallstudie zur Verwendung der L1 im japanischen Deutschunterricht: Lehrer- und Lernerperspektive (MaTDaF), 査読有, [in print].

Harting, Axel, (2014): Faktoren bei der Wahl der Unterrichtssprache im DaF-Unterricht in Japan: Umfrage unter deutschen und japanischen Deutschlehrenden, *Hiroshima Gaikokugokyoikukenkyu 17*, 査読有, 2014, 239-261.

Harting, Axel, Lehrsprache im universitären Deutschunterricht in Japan. *Neue Beiträge zur Germanistik Nr. 147* (Dimensionen der DaF-Forschung), 査読有, 2014, 75-91.

Harting, Axel, German teachers' classroom language seen from the learners' perspective. *JALT Proceedings*, 査読有, 2013, 16-23.

Harting, Axel, Anpassung der Unterrichtssprache an das Sprachniveau der Lernenden: Ergebnisse einer Befragung japanischer Deutsch lernender, *Hiroshima Gaikokugokyoiku kenkyu 16*, 査読有, 2013, 223-236.

Harting, Axel, Choice of classroom language in beginners' German classes in Japan: L1 or L2? *JALT Proceedings*, 査読有 2012, 112-119.

Harting, Axel, Ansichten japanischer Studierender über die Unterrichtssprache muttersprachlicher Deutschlehrender: Ergebnisse einer Fallstudie. *Hiroshima Gaikokugokyoiku kenkyu 15*, 査読有, 2012, 103-122.

Harting, Axel, Deutsch oder Japanisch? - Wahl der Unterrichtssprache im japanischen Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht, *Hiroshima Gaikokugokyo ikukenkyu 14*, 査読有, 2010, 101-115.

[学会発表](計6件)

L1 oder L2? - Ergebnisse einer Umfrage unter Lehrenden und Lernenden zum Sprachgebrauch im japanischen Deutschunterricht, 日本独文学会 2013 年春季研究発表会, 2014 年 05 月 24 日,

千葉.

Wahl der Lehrsprache im Deutschunterricht: Ergebnisse einer Umfrage unter deutschen und japanischen Lehrenden, 39th Annual JALT Conference, 2013 年 10 月 27 日, 神戸.

Lehrsprache im universitären Deutschunterricht in Japan: L1 oder L2?, FaDaF-Tagung; 2013 年 7 月 30 日, BOZEN 大学, イタリア.

Lehrsprache im universitären Deutschunterricht in Japan: L1 oder L2?, FaDaF-Tagung; 2013 年 3 月 21 日, BAMBERG 大学, ドイツ.

Lehrsprache im japanischen Deutschunterricht aus der Lernerperspektive, 38th Annual JALT Conference, 2012 年 10 月 14 日, 浜松.

Wahl der Unterrichtssprache im japanischen Deutsch-als-Fremdsprache-Unterricht, 37th Annual JALT Conference, 2011 年 11 月 20 日, 東京.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

ハーティング アクセル (Harting, Axel)
広島大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号: 80403509

(2) 研究分担者

吉満 たか子 (YOSHIMITSU TAKAKO)
広島大学・外国語教育研究センター・准教授
研究者番号: 20403511

岩崎克己 (IWASAKI KATSUMI)

広島大学・外国語教育研究センター・教授
研究者番号: 70232650